

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320178

研究課題名(和文)映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究

研究課題名(英文) Audiovisual Ethnography of Gong Culture in Southeast Asia: An Approach from Musical Anthropology

研究代表者

福岡 正太 (Fukuoka, Shota)

国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授

研究者番号：70270494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：東南アジアにおいて、ゴングは、霊的な力を備えた音具、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、(1)これまで研究の少なかったベトナム中部とラオス南部、カンボジア北東部、およびフィリピン北部における少数民族のゴング文化についての調査、(2)ベトナムとインドネシアにおけるゴング製作技術の比較調査、(3)インドネシアにおけるゴング流通の変化と製作拠点の再編および鉄製ゴング製作の発展について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Throughout Southeast Asia gong has played a significant role as sound producing instruments with spiritual power, musical instruments, properties showing political power, commodity for trade and so on. This research project aims (1)to investigate gong cultures of ethnic minorities around the borders of Vietnam, Laos and Cambodia, and northern Philippines, (2)to compare the techniques of making and tuning gongs in Vietnam and Indonesia, and (3)to reveal the process of restructuring network among gong production bases under the change of gong distribution, and the development of making of iron gongs.

研究分野：民族音楽学

キーワード：民族音楽学 映像民族誌 東南アジア ゴング文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 国立民族学博物館の音楽展示プロジェクトチーム(寺田吉孝、笹原亮二、福岡正太)は、全館の展示新構築の一環として2010年3月に刷新された音楽展示において、東南アジアのゴングを展示テーマの1つとし、カンボジア、フィリピン、マレーシア、インドネシアなどにおいて、調査、資料収集、映像記録の作成をおこなった。この展示および付随する映像記録は、ジャワ島やバリ島のガムランなどの大規模アンサンブルに比べて研究や記録資料の蓄積が少ない民俗的なゴング・アンサンブルや山地少数民族のアンサンブルにも焦点をあて、東南アジアのゴング・アンサンブルの多様性を明らかにした。

(2) 一方、人間文化研究機構連携研究『人間文化資源』の総合的研究の「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班(福岡正太、寺田吉孝、笹原亮二、梅田英春、久万田晋、藤岡幹嗣、依木悟、福岡まどか)は、主に日本の民俗芸能の映像記録の作成をおこない、関係者を交えた映像上映と意見交換を繰り返し、実践的に芸能の映像記録のあり方を探った。そして、映像記録を芸能から独立した「作品」ととらえずに、芸能の演者や研究者を含む関係者の相互作用を生み出し、その中で意味をもつものとしてとらえるにいたった。芸能の上演や伝承の過程を記録した映像は、対象を一方的に写し取るだけでなく、芸能を振り返り新たな発見をする場を提供し、映像を見る人びとと土の対話をうながし、芸能に関する理解を深め、それを共有させていく可能性をもっている。

(3) この2つの成果に基づき2011年3月に、国際シンポジウム「東南アジアにおけるゴングの映像民族誌」を開催した。このシンポジウムでは、交易品としてのゴングの音楽考古学的研究、ベトナム中部高原の少数民族のゴング合奏およびゴングの調律技術、バリ島における楽器商の出現とゴング流通の変化と製作拠点の再編、北米におけるフィリピン系アメリカ人のアイデンティティとゴング合奏、インドネシアにおける多文化教育の試みの一環としてのゴング文化に関する教材の作成、今後のゴング文化研究における映像利用の可能性等についての研究発表等がおこなわれた。これらの事例は、従来のゴング文化研究の枠を広げ、少数民族のゴング文化、東南アジア諸地域のゴング文化の結びつき、それらを仲介する楽器商や調律師の存在、現代社会におけるゴング文化の変化と再定置等について取り上げる必要性および研究を深める手段としての映像の有用性を認識させた。

2. 研究の目的

(1) ゴングは東南アジアの音楽文化を特徴づける楽器の1つである。それらはしばしば霊的な力が宿ると考えられ、権力を示す財産や交易品としても機能し、東南アジア文化の

中で重要な位置を占めてきた。ゴング文化の研究は、インドネシアのジャワ島やバリ島のガムランなど、王権と結びついて発達した大規模な合奏およびそこで用いられるゴングに集中する傾向があった。その結果、東南アジアのゴングは、表面にこぶのような突起を打ち出しているのが特徴であり、こぶをもつため安定した音高をもち、調律して旋律を奏でることができるとされてきた。しかし、ベトナム中部高原とラオス南部、カンボジア北東部にまたがる地域、およびフィリピン・ルソン島などに住む少数民族は、表面の平らなゴングを含む合奏をもち、さらにこれらの地域における平ゴングとこぶつきゴングを同時にもちいる合奏では、平ゴングが旋律を受け持つことが多い。これまで研究の蓄積があまり進んでいない上記地域のゴング文化を調査研究し、従来の東南アジアのゴングに関する知見の偏りを是正する。

(2) ジャワ島における青銅製ゴングの鍛造過程については、20世紀初頭、当時ゴング製作の中心であったジャワ島中部北海岸の都市スマランにおける調査記録が残されている。その後、ジャワ島のゴング製作の中心は内陸のスラカルタ近郊へと移った。また、大陸部のゴング製作の中心の1つベトナム中部における青銅製ゴングの鑄造過程については、これまでまとまった報告がなかった。一方、鉄製および真鍮製のゴングについては、青銅製ゴングの代用品との観念が強く、あまり研究の対象とされてこなかったが、近年、インドネシアでは鉄および真鍮製のゴングの製作が盛んになっている。それぞれ特徴あるこれらのゴング製作法を映像で記録しながら調査し、比較をおこなう。

(3) 人やモノ、情報の往来が盛んになるにつれ、ジャワ島中部スラカルタ近郊で製作される比較的安価で品質の高いゴングがバリ島を始め、島外でも大規模に流通するようになった。バリ島では大きなゴングを含むガムランとよばれる合奏用の楽器セットの需要が比較的高く、ジャワ島中部から大ゴングを購入し、その他のバリ島製の楽器と合わせてガムランセットを構成して販売する楽器商が誕生し、ゴングの流通を促進した。一方、小中学校の教育において各地方の伝統文化を学ぶ時間が作られるようになり、地方自治体が比較的短い納期に限られた予算の中で各学校に配布するガムランを大量に注文するようなケースが見られるようになった。こうした場合には、青銅製よりもはるかに安価な鉄製のガムランが採用され、受注者は各地の鉄製ゴングの製作者から購入してセットを構成するようになった。こうした需要や流通の変化が引き起こしたガムラン製作拠点の再編と鉄製ゴング製作の発展を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、現地における調査を重視して研

究を進めた。その際、映像を研究の重要な手段として位置づけ、ゴングの製作過程やゴングを用いた合奏等を映像で記録した。その理由の1つは、映像が動きや音を視聴覚的に記録することができるため、技術や上演の実態を伝えるのに適しているからである。映像を用いることにより、調査に同行しなかった者も、より具体的に、そして詳細に研究対象を比較することが可能になる。しかし本研究では、それに加えて、映像が見る者の知見を引き出す力を重視した。私たちは映像を見る際、これまでに経験してきたことや身に付けた知識を背景として、そこに映っているものを理解しようとする。映像の理解は単にリテラシーの有無によって一様に決まるのではなく、それを理解するために動員する知識や経験の違いにより多様な見方を生み出す。したがって、一緒に映像を見て意見を交換することは、互いの知見を交換して、対象の理解を広げていくことにつながる。特に、調査の対象とする人々とのあいだでも映像を仲介とした意見の交換をおこなうことで、研究者による一方的な知の形成を越えて、相互的に対象の理解を深めることができるだろう。

(1) 平ゴングを含む合奏をもつベトナム中部高原とラオス南部、カンボジア北東部、およびフィリピン・ルソン島では、次の点に重点をおいて調査をおこなった。

パフォーマンスの映像記録の作成

カンボジア北東部とルソン島のゴング合奏については、すでに国立民族学博物館のプロジェクトとして映像取材をおこなったため、ベトナム中部高原とラオス南部を中心に調査と撮影をおこなった。

映像の上映会

国立民族学博物館が製作したルソン島の平ゴングを含む合奏に関する映像番組の上映会を開催し、意見交換をおこなった。

(2) ゴングの製作過程と流通の調査は、次の諸点に重点をおいて調査をおこなった。

ジャワ島とバリ島、ロンボック島における青銅製ゴング製作過程およびその流通と製作拠点間の関係の調査。

ジャワ島とバリ島、ロンボック島における鉄製ゴングの製作過程およびその流通と製作拠点間の関係の調査。

ベトナム中部における青銅製平ゴングの製作過程の調査。

4. 研究成果

(1) ベトナム中部高原、ラオス南部、カンボジア北東部の少数民族は多様であり、民族集団ごとに合奏の編成やレパートリーは異なるが、ゆるやかな共通性もみられる。多くの集団において、平ゴングとこぶつきゴングの両方が使われている。それらの合奏は、A) こぶつきゴングのみの合奏、B) こぶつきゴングと平ゴングの合奏、そしてC) 平ゴングのみの合奏に大別できる。Aは、リズムの掛け合いに重点があり、一定のリズムパ

ターンを繰り返す。若干の例外はあるが、スイギウやウシの供犠と結びついているのはこのタイプの合奏であり、儀礼性が強く、精霊へ働きかける力をもつ。たとえば、死者が出たときに演奏される曲は、死者の魂を迎えるために精霊を呼び寄せてしまうため、普段演奏することはタブーであると説明されたりする。Bにおいては、こぶつきゴングが一定のリズムパターンを繰り返すのに対し、平ゴングはメロディを演奏する。Cは、ラオス南部などで見られ、2つの平ゴングを吊り下げ、2人ないし4人で両側から細長いバチで突くようにして演奏する(写真参照)。演奏は、複雑なリズムの掛け合いからなっており、この演奏で言語的メッセージを伝えているという。



ルソン島北部のカリガの人々によって伝承されてきたゴング音楽について、国立民族学博物館が製作した映像番組の上映会を計11回にわたりマニラ市およびルソン島北部の中心都市バギオ市で開催し、伝統継承者、研究者、教育者、一般の聴衆など多様なオーディエンスの参加により意見の交換をおこなった。映像が多様なアクターを結び付ける場となる可能性を確認することができた一方で、こうした学術的な記録映像を音楽や芸能のオーディエンス育成に生かすための工夫が必要である。

(2) 現在、ジャワ島の青銅製ゴング製作の中心はスラカルタ周辺となっている。Sam Quigleyによれば、20世紀初頭のスマランと現在のスラカルタのゴング製作法は基本的に共通している。本研究でもそれは明らかとなった。経験のある職人は、スラカルタのゴング職人がスマランでその技術を学んだことをまだ記憶している。一方、スマランにおける青銅製ゴングの製作は、現在ではほぼみられなくなっている。また、バリ島の青銅製ゴングの製作は盛んであるが、大型ゴングから小型ゴングへとシフトし、大型ゴングはジャワから購入している。スラカルタ周辺では、もっぱらバリ島に向けて大型ゴングを製作している工房が存在しており、ジャワ島とバリ島の青銅製ゴングの製作には、ある種の分業が成立していると言えるだろう。これを可能にしたのは、国内外のガムランの需要の増

大に対応したバリ島における楽器商の出現である。バリ島とロンボック島にも、類似した関係が成立している。ロンボック島にも青銅製楽器を製作する工房が存在するが、青銅製の大型のゴングはバリ島から購入してくることが多く、ここでも楽器商が、こうした仲介をおこなうようになってきている。ただし、ロンボック島では大型のゴングは島内の工房で作られた鉄製のものが使われることが増えている。

近年、インドネシアでは鉄製ガムランの需要が増大している。ジャワ島西部の都市バンドゥンやその近辺では、学校教育にガムランを導入するため、地方政府が数百の単位でガムランセットを注文したりすることが起きている。楽器工房では、短期間にその注文にこたえることができないため、鉄製ゴング入手のネットワークを構築して対応している。本研究の調査では、西ジャワ州の境界に近い中ジャワ州の都市プルパリンガやスラカルタなどが、バンドゥンへの鉄製ゴングの供給源となっていることが明らかとなった。プルパリンガは、自動車やバイクのマフラーの製作が有名な町で、そうした鉄加工の技術を生かしてゴングを作成する工房がある。スラカルタは前述の通り青銅製ゴングの製作の中心だが、鉄製ゴングを作る工房も存在する。鉄製ゴングもスラカルタ製のは品質が高いことで知られている。バリ島やロンボック島でも、近年、鉄製ゴングを製作する工房が生まれている。以前はゴングは青銅製であることが常識だったが、鉄製ゴングが好まれる傾向も生まれている。その理由の1つとして鉄製ゴングの方が軽いこと、行進をしながら演奏するのに向いていることなどがあげられている。

ラオス南部およびカンボジア北東部では、ゴングが製作されていることは確認できなかった。どちらの地域でも、人々に尋ねると、ゴングはベトナムで作られていると考えていた。実際に、現在はほとんどのゴングがベトナムで製作されているようである。しかし、おもしろいことにベトナムでは、ラオスのゴングは良いゴングであるとの認識がある。かつてラオスでもゴングが製作されていたのかどうか確認はできなかったが、ゴングの流通を通じて、各地域がゆるやかにつながっていることが明らかになった。ちなみに、研究協力者の柳沢英輔の報告によれば、ベトナム中部高原では、それぞれの民族集団ごとに音の好みがあり、それを知悉した調律師がゴングの注文主にあわせて調律し分けているという。

本研究により、これまで研究の蓄積が少なかった東南アジアの平ゴングを使用する人々のゴング合奏の実態が少しずつ明らかになってきた。これは東南アジアのゴング文化の理解を深めるための重要な一歩であると考えられる。また、ゴングの流通により、東南アジアの諸地域、諸民族がゆるやかにつなが

っていること、そしてゴングの需要の増大により楽器商が出現し、そうしたつながりを再編しつつあることも明らかになった。楽器商は、他の地域から仕入れた楽器をその地域の音楽に合うように調律、整音するなど、民族集団の好みに合わせて調律する調律師と同じような媒介者としての役割を果たしているともいえる。東南アジアのゴング文化は、私たちが当初想像していた以上に、現在も変容を続けている。ミャンマーやタイ、マレーシアなど、本研究では十分に関心を払えなかった地域についても、今後、研究を広げていくことが必要であると同時に、ゴング文化の現代の変容を、なお一層明らかにすることも今後の課題である。なお、本研究により作成した映像記録は、再度編集をおこない、国立民族学博物館などにおいて公開できるように準備を進めたい。

引用文献

Jacobson, Edward and J.H. van Hasselt, 1975 *The Manufacture of Gongs in Semarang (De Gong-Fabricatie te Semarang)*, translated and annotated by Andrew Toth. *Indonesia* vol. 19, 1975, 127-172.

Quigley, Sam, *Gong Smithing in Twentieth-Century Surakarta*, *Asian art & culture* vol. 8, no.3, 1995, 13-31.

柳沢英輔、ベトナム中部高原ゴング演奏の現在--演奏形態と旋律に関する一考察、*アジア・アフリカ地域研究* 9号、2009、65-85。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

福岡正太、音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割 徳之島の芸能を例に、*研究報告人文科学とコンピュータ*、査読無、2014-CH-104(10)、2014、pp.1-3

柳沢英輔、ベトナムにおけるゴング製作 フッキウ村を事例として、*国立民族学博物館研究報告*、査読有、38巻3号、2014、421-453

Terada Yoshitaka, *Audiovisual ethnography of Philippine music: A process-oriented approach*, *Humanities Diliman*、査読有、vol.10, no.1, 2013, 90-112

梅田英春、ロンボック島におけるゴング工房と楽器商、*沖縄芸術の科学*、査読有、26号、2014、120-130。

福岡まどか、伝統芸能を次世代に伝え遺すインドネシアにおけるNGO団体の取り組みから、*大阪大学大学院人間科学研究科紀要*、査読無、40号、2014、71-91

〔学会発表〕(計13件)

福岡正太、東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連、*東洋音楽学会*、2015年11月1日、東京芸術大学(東京都・台東区)

藤岡幹嗣、映像発表「東南アジア諸地域の
ゴング文化の相互関連」、東洋音楽学会、2015
年 11 月 1 日、東京芸術大学（東京都・台東
区）

柳沢英輔、ゴング文化の現代性 ベトナム
中部高原の事例から、東洋音楽学会、2015
年 11 月 1 日、東京芸術大学（東京都台東区）

福岡まどか、ジャワ島・ジョグジャカルタ
におけるゴングの製作と流通、東洋音楽学会、
2015 年 11 月 1 日、東京芸術大学（東京都台
東区）

梅田英春、バリとロンボックにおける鉄製
ゴングの普及とその背景、東洋音楽学会、
2015 年 11 月 1 日、東京芸術大学（東京都台
東区）

Terada Yoshitaka, Safeguarding
Intangible Cultural Heritage:
Process-oriented Applications of
Audiovisual Media, アジア太平洋無形文化
遺産研究センター国際専門家会議、2015 年 1
月 26 日、クアラルンプール（マレーシア）

Terada Yoshitaka, Recent
Documentation Project at National
Museum of Ethnology, Laon-laon Forum
and Conference-Workshop on Preservation
of Musical Heritage in Asia, 2014 年 10 月
16 日、ディリマン（フィリピン）

福岡正太、映像記録を民俗芸能の営みの中
に位置づける、日本民俗音楽学会、2014 年
12 月 13 日、東京音楽大学（東京都豊島区）

Terada Yoshitaka, Safeguarding the
Intangible: Cross-cultural Perspectives on
Music and Heritage, 2014 年 2 月 20 日、ロ
ンドン（イギリス）

福岡正太、東南アジアのゴング研究への視
角、東洋音楽学会、2013 年 11 月 10 日、静
岡文化芸術大学（静岡県浜松市）

柳沢英輔、ゴング文化を支える調律師 ベ
トナム中部高原の事例から、東洋音楽学会、
2013 年 11 月 10 日、静岡文化芸術大学（静
岡県浜松市）

福岡まどか、インドネシア・ジャワ島・ジ
ョグジャカルタにおけるゴング製作につい
て、東洋音楽学会、2013 年 11 月 10 日、静
岡文化芸術大学（静岡県浜松市）

梅田英春、東南アジアゴング文化研究への
提言、東洋音楽学会、2013 年 11 月 10 日、
静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）

〔図書〕（計 4 件）

Terada Yoshitaka (ed.), Robert Garfias,
Ramon P. Santos, Michiyo Yoneno-Reyes,
Usopay H. Cadar, Fukuoka Shota,
National Museum of Ethnology, *An
Audiovisual Exploration of Philippine
Music: The Historical Contribution of
Robert Garfias* (Senri Ethnological Reports
133), 2016, 124pp.

福岡まどか、大阪大学出版会、インドネシ
ア上演芸術の世界 伝統芸術からポピュラ

ーカルチャーまで、2016、188pp.

Fukuoka Shota (ed.), Phong Nguyen,
Yanagisawa Eisuke, I Made Kartawan,
Terada Yoshitaka, Fukuoka Madoka,
Sugiyama Masako, National Institute for
the Humanities Inter-Institutional
Research Project “A Study on Visual
Ethnography of Performing Arts as Human
Cultural Resources, *International
Symposium Audiovisual Ethnography of
Gongs in Southeast Asia: Proceedings*,
2015, 73pp.

Terada Yoshitaka, Institute of Folk
Music Research and Ethnomusicology at
the University of Music and Performing
Arts, *Kulintang* music and Filipino
American identity, In *Music and Minorities
in Ethnomusicology: Challenges and
Discourses from Three Continents*, edited
by Ursula Hemetek, 2012, 75-87

〔その他〕

福岡正太『スラカルタにおける鉄製ゴング
製作』（映像作品）、2016

福岡まどか『インドネシア・ジャワ島中部
ジョグジャカルタにおけるゴング製作 (*Gong
production in Yogyakarta, Central Java,
Indonesia*)』（映像作品）、2015、日本語版、
英語版

柳沢英輔『*Po thi*（ジャライ族の墓放棄祭）』
（映像作品）、2014

寺田吉孝『祝いの音、勝利の記憶 - フィリ
ピン・ルソン島山地民の結婚式、』（映像作品）、
2014、日本語、英語、イロカノ語版

Terada Yoshitaka, *The Maranao Culture
at Home and in Diaspora*（映像作品）、2013

寺田吉孝『クリントン音楽の至宝 - マイモ
ナ・カダー』（映像作品）、2013、日本語、英
語、マラナオ語版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福岡 正太 (Fukuoka Shota)

国立民族学博物館・文化資源研究センタ
ー・准教授

研究者番号：70270494

(2) 研究分担者

寺田 吉孝 (Terada Yoshitaka)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・教
授

研究者番号：00290924

梅田 英春 (Umeda Hideharu)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：40316203

久万田 晋 (Kumada Susumu)

沖縄県立芸術大学・附属研究所・教授
研究者番号：30215024

福岡 まどか (Fukuoka Madoka)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：40379318

藤岡 幹嗣 (Fujioka Motoshi)
立命館大学・映像学部・准教授
研究者番号：80351451

(3)連携研究者

笹原 亮二 (Sasahara Ryoji)
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
研究者番号：90290923

俵木 悟 (Hyoki Satoru)
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：30356274

(4)研究協力者

柳沢 英輔 (Yanagisawa Eisuke)
同志社大学・文化情報学部・助教
研究者番号：00637134

杉山 昌子 (Sugiyama Masako)
バリ島在住